



視覚障害者を対象にした指圧講座。まずは綱川さんがやってみせ、一人一人に直接指導する



地域の人々とも積極的に交流。「カルロスさんはがんの影響で体に痛みがあったため、マッサージで和らげると気持ちよさそうにしてくれました」

「最初は、日本とまったく異なる環境で戸惑いも多かった。でもある時から、細かいことを気にせず、これでいいんだ」と思えるようになったんです」と綱川さん。そして彼のそばには、いつも温かく、そして力強く支えてくれる幸子さんの姿があった。

「手から手へ」と技術を伝えながら、誰かの役に立ちたい。綱川さんは志を新たに、次の夢に向かって動き始めている。

東洋医学への理解を広めるイベントに参加し、東日本大震災への募金を行った綱川さん(右端)と幸子さん



ニカラグア from NICARAGUA

シニア海外ボランティア

東洋医学の力で 未来を切り開く

鍼灸マッサージ師、盲学校の教員の経験を持つ綱川章さん。定年後の活躍の場として選んだのは、シニア海外ボランティア。中米のニカラグアで、東洋医学の技術や知識の普及に奔走した。



「視覚障害者4人が共同で指圧クリニックを開設!」
2012年1月、ニカラグアの大手新聞に大きな見出しが躍った。盲学校すらないこの国では、視覚に障害のある人々が仕事を持つのはそう簡単なことではない。ただでさえ失業率が高いこともあって、画期的なニュースだった。

実は、このクリニック開設の裏側には、ある日本人男性の支えがあった。シニア海外ボランティアの綱川章さんだ。

30歳の時、病気で視力を失ったが、「目が見えなくても、挑戦できることがあるはず」と、はりきゆう・マッサージの技術と教授法を学び、盲学校で教員を務めた。

「周りの人の助けがあったから仕事を続けてこられた。定年を迎え、今度は自分が社会にお返しをしたい」。そう思っていた綱川さんに、若いころ海外でのボランティア経験があった妻の幸子さんが勧めたのが、シニア海外ボラン



指圧講座の卒業生によるクリニック開設を伝える記事。これをきっかけに講座に参加した人もいた

「ニカラグアで東洋医学の指導者が必要とされていると知り、これだ、と。海外に行った経験はなく、語学も苦手だったので、技術なら体を使って教えられると思ったんです。不安はあったが、あきらめて後悔するよりも、挑戦したい。鍼灸マッサージ師としてニカラグアの首都マナグアで幸子さんと二人三脚の日々が始まった。

東洋医学の知識を手から手へ

透したニカラグア。薬に頼らない治療法として注目されているが、それを正しく実践できる人材が不足している。

綱川さんが派遣されたのは、長年ニカラグアに住む日本人が学長を務める日本ニカラグア東洋医学大学。中米で唯一、東洋医学を学ぶ高等教育機関だ。綱川さんは正しい東洋医学の知識と技術を持つ人材育成に向け、授業内容の改善に取り組むことになった。

東洋医学では全身に361もの経穴(つぼ)があり、そこにはりを打ったり指圧して治療する。その正確な位置を知ることが、基本中の基本だ。「教授も学生も教科書で勉強しただけで、実際に体

に触らせると位置を正確に示せませんでした」。

そこで綱川さんは、実践的な技術の指導を強化することに。学生同士でつばにシールを貼り、正しい位置を覚えてもらうなどの工夫をした。同僚のレイ・カステイロ・ジョ教授とも確認し合いながら、実技を重視した教え方を伝えていった。

「ドクトールアキラ! つばの場所はどこで合っていますか?」

「私にも指圧のコツを教えてください!」

綱川さんの手を引いては積極的に質問する学生たち。「東洋医学の技術を吸収したいという気持ち伝わってきました。やりがいを感じた瞬間です」と綱川

さんはほほ笑む。

さらには綱川さんの経験が発揮されたのは、視覚障害者が指圧の技術を学ぶ講座での指導だ。学生によって見え方も違えば、いつ視力を失ったかによって心理状態も違う。そんな彼ら一人一人を理解し、気を配れたのは、同じ経験を持ち、障害者教育に長年携わってきた綱川さんだからこそ。骨格や筋肉のつき方、つばの位置、症状の見分け方、指圧方法を伝え、彼らが手に職をつけて自立できるようサポートした。

講座に参加したマルビン・マルティネスさんは「これまでは助けられる立場でしたが、技術を身に付ければ私も誰かの役に立てる。そうドクトールアキラが教えてくれました」と話す。講座の卒業生たちはクリニックを開設したりホテルに就職したりと、自立した生活を切り開いている。



大学生に指圧の技術を指導する綱川さん(左から2人目)。「集中力が続かない学生も多かったため、学生同士でペアを組ませ、1、2、3と私が号令をかけて一斉に練習できるよう工夫しました」